



# クライアントとの対話

＜幻聴に悩まされる男性とのカウンセリング＞

向後善之

ハートコンシェルジュ(株)カウンセラー

# クライアントX氏

- 青年期から幻聴に悩まされ投薬治療を受けている40代男性
- 現在非正規雇用社員事務職として働いている。
- 一人暮らし
- 最初に発症したのは、25歳のとき

# X氏との会話

- X1 人格の統合は可能でしょうか？夢は統合への王道と言ったセラピストがいたようですが、やはり影の人格の全てを統合できるわけではないのでは？
- Th1 影の人格とは、どのような人格ですか？
- X2 自分の場合はハッキリ幻聴が来ていますから。たしかに女と子供の声であり、女性性の統合とインナーチャイルドの統合だということはわかるのですが、その統合の自信はあまりありませんね。
- Th2 統合という目的ははっきりしているけど、実現は簡単なものではないということですね。



# X氏との会話

- X3 不思議なことに男の声は、ほとんど聞こえないんですよ。
- Th3 どんなことを言ってくるのですか？
- X4 今日は幻聴に虐められて泣いています。そういう日も多いですね。
- Th4 女性性とインナーチャイルドの統合とのことなので、やさしい女性なのかなと思ったのですが、そういうわけでもないのですね？
- X5 要は私自身、笑いと涙の波が交互にやってくるということです。それは分裂しますよね。
- Th5 笑いと涙ですか。人生そのもののような感じもしますね。ですね。しかし、それが凝縮した形でやってくるのでしょうか？

# X氏との会話

- X6 凝縮ですか。全身全霊みたいな感じですね。
- Th6 凝縮は、僕の想像です。どうでしょうか？Xさんの今の感情と照らし合わせて、「凝縮」という言葉は当てはまりますか？
- X7 それよりも、幻聴の場合は解離性同一性障害や多重人格と考えたほうがわかりやすいのではないのでしょうか？サブパーソナリティが浮上しているというふうに。
- Th7 解離性同一性障害と、サブパーソナリティと、幻聴・・・確かに根本は似ているのかもしれませんがね。今後の研究テーマにしたいですね。

# X氏との会話

- X8 研究頑張ってください。
- Th8 はい。
- X9 この数年、幻聴さんと自分とでどちらが正しい？どちらが間違っている？という平行線、水掛け論だったような気がします。  
たとえば、もし幻聴さんのことを守護霊と言ってしまえば、幻聴が正しいことになり、幻聴を低級霊・邪霊と言ってしまえば幻聴が間違っていることになります。  
だからサブパーソナリティと考えたほうがうまく付き合えるのではないかと最近思っています。  
異界の声イコール召命だとか、霊主肉従とかそういうのに少し囚われていたかもしれません。イコールパートナーですかね。



# X氏との会話

- Th9　すごい洞察ですね。つまり、幻聴とXさんが対等の立場になったということかと思います。対等の立場の幻聴は、完璧な存在でも、完全な悪の存在でもないわけですね。普通の対等な存在だから、正しいことを言うこともあれば、間違ったことを言うことがあるわけですね？だとしたら、幻聴と話し合うことができるかもしれませんね。僕も、クライアントさんの幻聴とディスカッションすることがあります。「幻聴はイコールパートナー」・・・すばらしい視点だと思います。
- X10　それはすごいですね。　ディスカッションで幻聴が引き下げれば患者さんも救われますね。

# X氏との会話

- Th10 実際、引き下がったこともあります。
- X11 自分の幻聴も退治してください。
- Th11 退治というよりも、真剣に話し合うのです。お互いの感じ方を尊重するという前提で。
- X12 では真剣に。自らの行為と幻聴の間に相関関係は確かに存在すると思います。
- Th12 どんな相関なのでしょうか？



# X氏との会話

- X13 自分の幻聴は「笑おう」と「遊ぼう」の二つだけです。特に「笑おう」です。幻聴が先で、それに影響されて行為が決まると言う感じですか。そうだ！幻聴より先に自分が心の中で唱えたらどうなるのでしょうか？面白くありませんか。
- Th13 面白いですね。心の中で唱えたら、一体どうなるのでしょうか？
- X14 当然これは主導権争いですね。神出鬼没の「笑おう」という言葉の洪水です。

# X氏との会話

- Th14 「笑おう」が洪水になると笑うのが難しくなるから、そっと、やさしく、ときどき「笑おうよ」とでも言ってもらえるといいのではないかと思うのですが、そういうわけにもいかないのでしょうか？
- X15 全くおっしゃる通りです。先生、いいことをいいますね。やってみます。
- Th15 その結果をまた教えてください。

# 考察

- セラピストの方から解釈をするということではなく、不確実性を維持し、クライアントからアイデアが浮かんでくるのを待つようにした。また、全体的に、セラピストは、クライアントのそれまでの発言をふまえた別の質問という「対話主義」の形をとっている。例えば、X1におけるクライアントからの質問にセラピストは答えないということによって不確実な状況が維持されている。その結果、クライアントの発言をふまえた別の質問を繰り返す（Th1,Th3,Th4,Th5など）という形の対話の中で、クライアント自身からアイデアが生まれやすい雰囲気が生まれたのではないかと考える。クライアントからアイデアが生まれた時（例えば、X7,X9,X13）には、セラピストは、それに対し、共感的に対応した（例えばTh7,Th9,Th13）。



# 考察

- Th1、Th3、Th5において、セラピストは、クライアントに幻覚をより語ってもらうように働きかけている。X氏の場合、幻覚について語るにより、幻覚に対する不安・恐怖が増幅するような傾向は認められなかった。
- Th2、Th5、Th9、Th11、Th14において、セラピストが、幻覚・妄想に対し別の視点を提供することにより、ある程度ポリフォニーに近い効果が見込まれる可能性が示唆されたと考える。

# 考察

- 全体的に、つらい感情を危険物扱いするのではなく、その場の自由な感情の流れの中に解放するよう心がけた。こうした対応の中で、幻聴とクライアントの関係は、幻聴が主でクライアントが従ではなく、イコールパートナーであり、幻聴はサブパーソナリティなのではないかという考えに至っている（X9）。つらい感情を自由な感情の流れの中に解放することが、クライアントの創造性をサポートしたのではないかと考えられる。

# 考察

- 幻聴を召命と捉え、自分との関係を霊主肉従と考えていたX氏の意識が、「幻聴はイコールパートナーである」となる変容は、X氏の精神的成長を示しているとも言えるのではないか。
- X13においてX氏は、「面白くありませんか？」という言葉述べている。これは、クライアントの中の幻聴に対する恐怖が低減したことを示していると考えられる。